



想從著聞奇集

三

^ 13
1191
3



門へ 113
號 1191
卷 3

想山著聞奇集卷之三

目錄

- 一 元之天師誕生水叔の不思議の事
- 一 養乃怪虫の事
- 一 蔵り大陰囊と賣る其病氣の接り替りする事
附大陰囊の事
- 一 狩人異女り逢する事
- 一 七豆の精死人と怪死の事
- 一 天色火の如く成る事
- 一 油を掌に女の事
- 一 大蛇の事
- 一 金と通る糞念死く後去棄する事

想山著聞奇集
卷之三

目錄

英法盗現尉とありある事

一いさる坊主に化す事

英緩回舟乃事

一電の降くる事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

元三大師誕生水教の不思議の事



河内淡井郡河村町の玉泉寺といふ天台宗の近
色衣の列とありは前々元三大師誕生の地たり幸堂を
二重造りし則元三大師の像と安置せり堂の前より
井河り是元三大師の誕生水之為の井の如く丸くして深さ
六尺河まり水は常流たり清き清き清き清き清き清き
は井昔より創りて毎年七月七日は水と浴へるに其の
事る事と井底より水と教又七粒うかぶと出るに年によりて
十粒河まり出る時とあり其教の出るを期して浴へ其
事りる事と井底より水と教又七粒うかぶと出るに年によりて
比叡より居る事とあり法海よりとあり彼寺にありて
は事委しく見ゆる事とあり故着て教たり

井に洗居おの出ののまゝにありしにやと回減り
變々年淫するおのりる河をせりりるも新妻教たり
は教の多女よるも〜十年の豊出と知る〜をるの
舊民はは教占と待〜とぞ去民の云ゆる昔淺井
備前守長政の兵糧倉よの山奥り〜
そ倉の教地中と〜り来〜は所(出)〜と〜もがは
た〜又は教り不思減のりり年〜の教は寺は貯へ
置り〜と替る事〜と〜人の〜ひ〜他(移)
あを三日のうちに〜る〜も消失る〜あまに夜〜た〜る
事〜〜〜九月〜〜竹共量り知〜事〜はぬ〜
活ら〜と〜り一奇事たり

養の怪虫たる事

蟻蜂の怪虫のり〜の事〜童叢とある事〜引越と
割る事〜と〜の〜吸引板の谷〜椀の〜
菓子〜と〜動〜椀下(落)〜の〜業
ゆ〜或〜蚊蜂故の類と〜入事〜人
知事〜と〜〜〜
笑るの故記〜ぬ文政元年寅頃の事と〜
播別佐田郡佐田宿の醴原と云茶屋の表庭〜養と
馳〜と〜ひ九二尺餘と隔ち〜良之妻め〜合居る
内り馳の口より向〜海の〜と物出〜養の口入
次第に馳弱りたる景色〜馳〜死〜
不思減の事〜馳の血と吸〜た赤〜のあたふ
を〜に白〜のあ〜吸〜る〜
三二



鶴川儀



思ふるも是候田原の属中多由某伏用者の近而平放
よ前の陣屋迄の是現今見傳りて是國今より速く安
きふ吐くたのり 平後より伏用
近ハ五十一丁あり
或人け筆記と見く是今今日迄も中総の由伏原
うの事ぬぐ魁一丈杖束のより有く是下に善一丈
居てお射けかよるが魁の身許もくめさくく
只今向て縁のぐも是のせり善の口に入奉良善
〜魁を次第に弱りまうりに斃りたりと云の事
諸國とも邂逅りて者奉と見えたり此もさるる
とさるるを
又將野侯の院先主或時佐右の初燈の油細く虹のぐ
ぬ〜致〜たり是ハ何故奉と驚く能見是ハ彼知

ぬ〜成〜か油と向二る然る〜向の極の下の帳巻の
口に入ると見く是〜りも〜ぬ善さうひ〜成り
この事現り右先主の世のり建或人の落り〜
又備前長山侯の藩中竹素の小見年七の甲りあり
或日善合のり熱出〜夢中ぬ〜り〜注出〜注
止〜ハ又注出〜何の病めや毎〜難〜何のせよ善所
と也にきき〜〜〜何某ハ便也〜初きるに去藏の
礎のありりま〜大燈出〜り是ハ燈及〜思ハ眺先
居ると奥め〜小見のり〜注出〜り〜大をま〜り
〜え注も止〜き〜何の〜怪者奉〜る〜完早〜あひ
火を燃出〜る〜志〜眺め居〜り又注〜り大燈を
〜りち〜る〜善〜〜又小見のり〜注出〜り甚〜善

思ひ急ぐと燈火と持ちて火の出る所を見つるに小兎の
歌をよめや石と焼く草の如くを挿し暮解のものを
梅へ並べり我の中は竹の埋めたる松子故郷成り
暮と大なる灯ありて是實にさたる後ゆく埋めたるが
は養死めとやとどけり是の若くは居たりとありて
釘と板葉の如く挿へ致ちやりたりと後小兎の足もと
熱と伝く涼く常時小復りたりと是と前の多面
の又若くは時牧村某と名乗るる長山廣の藩中より
くる時現りて是等と知居る時とありて是よりやとあり
多面の宿りてありて宛早五十年と以前の事ゆゑ
天明の寛政の初の事とて是も怪なる事也
板板の怪なる事と記しつゝの書は述べて見ゆりて

とて耳囊と云随巻に記しる故に心持りて成りて
ゆゑ全交と抄出さるる夜に載ぬ
板巻の怪の事 附 怪と云ふと板巻別種成事
當座めりて回景の宿りたるハ枕程の怪異者なり今より
ありて是を見ても多し心も怪なるもの之既り
ともめば馬心氣衰へ於に枯骨とありて人回と又床下に
暮住りてと家の人替りて暮へ於て事ありある古き
家に住る人何れも煙の如く氣血衰へて我日暮るど
極むるに來りて竹の事とありて梅下へ死にたり清
知も我を猫鮫の類極陰は居るとりきり引入る松り
入りて是れももの事後く者一故に不思議小あり
床と雜し梅下へ入室くるに是れも善悪ありあり


住居より一か毛髪指背の形影を傳り背一故全にその
仕業のりり一彼とのそお教一捨一麻下と掃除たす
くもを彼病人と日増愈くるく平仕年の時西之保
の牧野こに居りて一英皇のとき度面と詠め居りて
春のまゆのう通例より大なる毛虫石のこどと這ひ居り
しに極つ下より養出く右毛虫よりこ大余を痛むし
場而へ這ひ居り養く有く口と明く見へくく大程先の
毛虫と及びて見へく右毛虫を養の口の肉入るるを
年経一養の人氣と吸んも言言へ思ももどま
柳生氏の活り一八上野寺院の庭めく養龍とあり
しつりのもも氣と吹然一に龍創きく死せしと
とを想くまこに撲の堂り居一お堂有右とと居て

見一に龍の形はとけ共一と右寺院の傍り一
吐一りりなり
但撲の足もの指前へ向くる通例之女の礼とありと
指先と後りへ向くる養ハ心悟とありと老の
語り一由坂部能別お活りなり
と云くは幼りお遠育るる養く思くる前条の條と
たつくる養もも人指先の後り向りたりや能たあり
徹く心は直まなり
大蟻蜂の事ハ八巻に記
色又養と伏並と
振ふる事ハ十一の巻に記
色又養と伏並と
附大陰囊の事
巖に大陰囊と賣くくそ病氣の核り整りくる事
市右田町四丁目
字井小屋
小海野景山
と云因易觀相小秀

其の賣下者といふ者生前の甲別ありて中年にむり伊豆
 浦之邊に居たりは時景山の隣家に病發陰囊
 入り後大減其大さ米六斗と囊入り入たふ程あり形
 丸くして是と前の方へ廻りて一居あり頭より丸
 の方が一より前より目より身許の陰囊より溢る
 見えざる程ありて倍の外のも業の初程より丸く
 陰囊と胴との間よりもと伸く腸後へ通るる自由
 多履草鞋と造りて高し下りては煙りとまき居る
 たりて或年十月二十日の夜の幸なりは大法囊の囊の
 方にお腹の身相成者ありて髪並の程ありて名を物
 大勢あり集りて地乞い成皆く夜更と酒あり大強町と
 ぬり居るに似たりし者居るに大さ米六斗と囊入り

同より皆極のまは極深ありて心さきありてま
 せくは後名を物大さ故のまは入りて強が愛か
 景山と名を物大さ故のまは入りて強が愛か
 板城のいまりに名を物大さ故のまは入りて強が愛か
 ナレト故未にも百ありて賣りて其まきやと云彼者安
 云板城のいまりに名を物大さ故のまは入りて強が愛か
 ありていまりに名を物大さ故のまは入りて強が愛か
 イヤまたその角より一色ありて心さきありてま
 以故彼景山又故のまは入りて強が愛か
 名を物大さ故のまは入りて強が愛か
 又賣りて其まきやと云彼者安



寺山


主君の安く秘蔵ふいらんごもま〜の口を結ぶ名主様の
 後〜で肩〜とげ〜一〜つ〜め〜せ〜う〜と〜く〜大勢一猪よ
 もとお賣買の約とま〜〜後皆安〜に帰参を
 くり後〜よ〜後名主の景丸〜痛〜止〜ま〜肉よ
 匠〜ち〜成〜後〜少〜大〜采〜全〜程〜小〜成〜〜難〜成〜せ〜と〜終〜又
 主君の安〜白〜く〜夜〜に〜玉〜小〜成〜〜三〜年〜後〜と〜ま〜く
 平〜人の〜世〜り〜は〜成〜〜ハ〜花〜御〜と〜活〜牙〜と〜〜遠〜近〜(上)下
 せ〜〜使〜さ〜も〜と〜も〜か〜乃〜後〜主〜の〜世〜と〜大〜ま〜〜ハ〜成〜き〜も〜も
 主君の儀〜三〜一〜程〜の〜世〜り〜た〜る〜の〜と〜め〜〜あ〜り〜と〜三〜夜〜の
 分〜ハ〜物〜ら〜は〜消〜滅〜せ〜〜の〜や〜り〜の〜と〜と〜と〜の〜世〜よ
 忌〜〜と〜と〜云〜事〜を〜知〜る〜と〜事〜は〜恥〜も〜老〜角〜悪〜劣〜事
 又〜端〜不〜論〜と〜事〜的〜〜ハ〜成〜ま〜よ〜と〜せ〜ぬ〜が〜う〜又〜吾〜事〜と

能くもつゝハ勅てとまらるが宜しき状名前とありし
安色とて今ハ意をとり景山と依り母の病を
因初くまじい戸へを来りて尋らるるを然る
是と見ゆる時かのお治拾遺より右の顔はまじい
病を病せり入る本のはげやうらまを病りたる
多し鬼どもの来りて殊遊ぶ能く出り殊うかぐ
鬼どもの身はけり又心あるべしとて質は形を
病し鬼の病と扱しとて常の顔となりたり
相濟の病のたりの顔より大なる病ありたるが事
恙とてまじい人の病を治りてかの病は形を鬼どもに
まじい病はまじいものなりとて鬼どもにまじい
病は質の病ハ返せしとてやぐりて投付るまじい病を

一増りとの事と嘘ハ云難し又戸塚の大塚丸と
云事あり昔元禄年間的事や東海道戸塚宿に
大塚丸の食を食しと云物ふ又は宿り明和安永の頃
よりには二代目の大塚丸とて享和頃迄と存命あり
きりて子供ありて父の世に能く笑ふ又母り
はんだせ戸塚の本を流り嘆きもつゝ名を
まじい病とて程ありて安行はまじい病とて
二三斗やぐり入るる囊あり前乃伊豆の玉ハ中
及びその事と思はる物もまじい病とて一の病
り朝の口比より入る事比述ハ甚だまじい病とて
前より病ハ病とてまじい病とてまじい病とて
まじい病とてまじい病とてまじい病とてまじい病とて

四ツ頃より十分におくまき一由成奉紀毛人母の母
けと見え無くし松波の實り一玉便の奉之水とみく
治療と成き交と母輝とみくしとせきまバかの食
言くし松四志しとみくしとせきまバかの食
幸しし今ハ陰囊のかげし澤山し施成更
に後と安根り養いしを治療の奉ハ免しあをきと
新まりと笑傳へり海内才一の海道に居る奉ゆ忍
け玉此奉ハ日本國中の少量とせ安知ぬとまり
しと妙成ゆけし玉文ハ建業ゆめゆめしとまり
ゆめゆめ大徳の妙と色し陰囊の取ハ凹形ハ完
成しゆり例ハ死と並是とありしと強とをい居
たりと又予文政三年と見えし一江戸九段坂のしとみ

病氣の是り入きかを食と只一夜見交り是の即ち
米式汁入程の大ききとせと病氣陰囊より溢きと
右の是り入は是股の取の大きき丸並の人の腹の取
程も何のしと是背りありしハ細きとせ是のゆび
と肥太りあり丸の埋めしと松り成居りを交合
肌合を前り云居塚の取ハ同奉之は者ハ尻とせ
能るんえ並りるまきと并とのしとありたるとせ
重ぬと外大法囊の食食ハ江戸も遊遊見南り
事とせ者もども是とみくしとせ又予が友
山崎養成文化十二年己二月八日塚島色行せ時健来
席とせと大法囊のしと鈕とせとありしと
強とを居ると見えしと一是ハ三代目の大塚丸と

見んえりりといふ



又云今如來年に... 大む乃を食はるは出衆より玉の

ちき本二才入袖も... 是又好愛也之是ハ病氣の由... 痛出衆しと人の云り... 或は難後せし中... 或は難後せし中... 或は難後せし中...

持人異女り逢する事

市谷自護院小西應房と云道心坊主あり... 終日働居る... 西應房ハ尾張の國中...

雲の危るもたふまの得と好む花弾の國り初め物人成
信別ハ勿論羨儀加賀越前中ふまも山後まに渡り
歩初く物書一とまも怖りのりと思ひ来も明り
一に或時お供をさ修り獲おるも故置しと海にぞ
御嶽山の麓の方へ深くとけ入るなりと明り朝乃
ゆり猪めくも懸えんと曉を待居るも此の方の東も
かちあつと想つるに小まると峯へより鞍やあると四方と
見立一吸るとまを信居るに遠向の御嶽山の方より
篠竹とありある者もま松子竹も見極めるとま
不意に思ひく能く見まは女も後には方と自然て
まよりい深山より伝令をせよも女の初よりま
ま新明方より女のある道理地へおと昔と

今述を運能那のまこの番化り遺ざりしに今ある
そのれ尋常のものに地を川ぞち川ありあるの流ハ
は幸も我運天下とままも今と海り成る
〜〜知〜〜去りて天魔のませよ鬼神り
あよもとあよ〜〜九教さるハ世一運ハ天は任さ
一勝負あり伝令如何成天魔鬼神も一あよち教
さんと一ちのり時り用ら流の疎いむと出〜〜流絶
込車一ま氏ゆ成と待居るにい流ハ甲一乙一を編合伝
ニッ持居る者の身り〜一而運天下の
危急の時りまらむらむらのり女ハ流中に際とる述あり
あるまもまもあふん〜〜あ〜〜りて彼女を怒て
〜〜ハ先決地と止らまは我より幸も〜〜ある者
皆〜〜ひとるまも〜〜り地と〜〜ま〜〜

聴ひあふくハ我ハ幸も笑えざるべしと云ふ声なき
あこやうに常々人よおもしろ祿ハ将人とかうハ
地もて女の云うともさうさやと思ひく進ぶ後
能見まじハ容態羨慕する十六七才の少女之様も
は少女のくさ居るがく世のさ世物成目より見ん
も戻るや何れとせよ実の人間あるあり暇も
かく中りもあな人回のち事とさうも青くさうりも
方便でお死べしと云う思ひ居る故彼女
又云や免前我とおんと思つるまじも能令何故
も係りくも我ハ法死のまじもあつるまじのよ好ん
心と静く笑ふるまじも故實をたも一日ハ
りも涙と笑べしと云うおあつるまじも好ん

よひるハ我ハ飯田願の行村の行果の増進今より十三年
に前ハ七月の事なりと云う進むるにハお洗ひよ
初ハ進むる因縁のまじもあつるまじの山の新成
まじも故つよ告るまじもあつるまじの父母ハ兄と弟
を白と我志白とて常々思ふ弟ハ供養のまじも
終ふく事なりと云う事なりと云う事なりと云う
障得と成り我既ハはあまじも年ごろ何と候か
来年ハ珍磨の神と成り一級の弟進とまじも事
成りしに此七月ハ十三回忌ハあつるまじも又成り
佛事供養とて我既と弟ハあまじも
障りく成り来年珍磨の神と成り事なりハ難ハ
又母よ告知も及思へとも告る事なりと云う又誰

頼むとて人々を乞とて父母より告げんハ主保さるハ
 何と日頃心は思ひ通り候へ候へ候へ候へ候へ候へ
 竹年故つへ行父母は討面候へ候へ候へ候へ候へ
 我なり佛事ハさる佛供ハ候へ候へ候へ候へ候へ
 らさの候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ
 早く先戻り得装束とぬと捨候へ候へ候へ候へ候へ
 とらぬ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ
 父母と初候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ
 出さるハ十六歳の時ハ西後房の者ハ十三年終
 の事ハさる候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ
 何とやう候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ
 考ふるに仙女の宿願の義森候へ候へ候へ候へ候へ
 候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ

六十五宿願林也

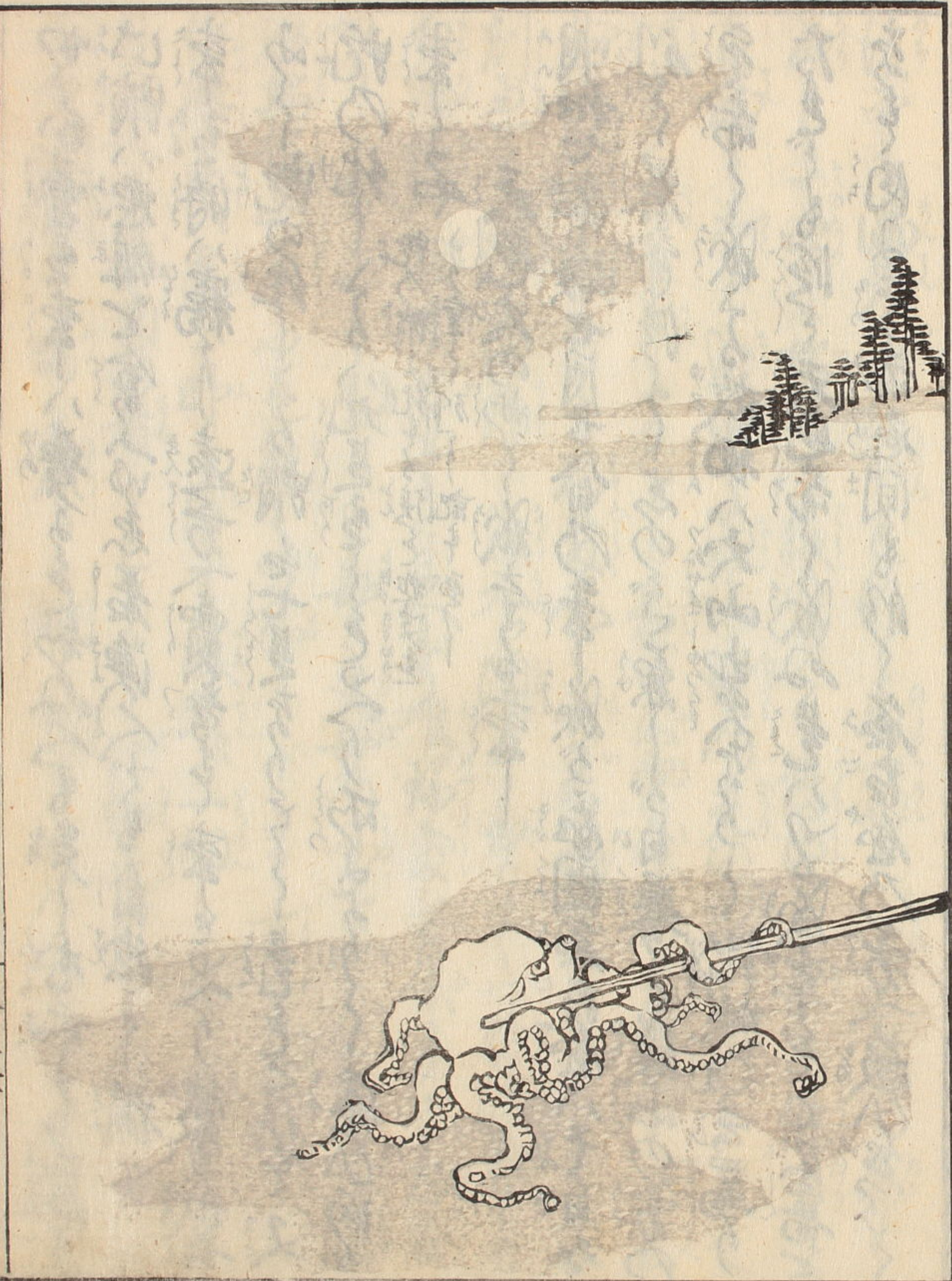


艶色に量に海にせりなりと曰く一と見えたり相
少女のりいれ後乃の命と驚く我一命を懸く
朝堂極歎く勇と平の立疾物の命と死と業と
己の罪業と己と悟りて海に是のこころと海は
餘事とて世と海りてとせし由事能く
心懸り傲せしやと教へし物人と成り
谷吉屋へ出で武家甚うとてとてとて
後り自遣院へ入り道心房と成り月ありたり
彼寺へ常々親愛なり時信信とてとてとて
遺庵とて思ひにありとてとてとてとて
跡り多し回院の深居念阿院は丹の和を
能知所ありとて年月村々の名ありとてとて

さきと外は寺内は誰も免れ居るものあり跡り多し
竹は彼信の若侍の事故寛政の享和丁改乃事と
知しとて

七是の朝死人を怪死事

特別飯野郡多食村飯原村色小
より二三里と北西と特別
の東方の候はたり
七是の朝ありとて
多し大膽不敵の悪行とて
食せしとては朝の大威お陸へし野之味へ
初し新毒の死人と居りたり
人又まを知りて事と事とあり人
多しとて北回筋又ハ出船松首色の東山海り居る
一丈も二丈と有朝とて思ひたりたは也とて



かゝる憂を幸ハ憂ふも知ぬ人も多しむ前も云母り
は精ハ思惟と食ハの念若漢人ども自然リ痛せし
事ハ時ハ竊リ遠方ハ賣き事と入り能登載前
めく蛇の化ハる精ハ七足ありて是とくつと又
蛇の化ハる元是とくつと入り亦より遠ハ河
来リ也 蛇の精ハ化スる法を記シ

天色火のゆく成る事

明和七年庚七月廿八日
山崎松平が御園を吉原ハ至日
別々着座修く志のどく兼ハ日暮後山の方
を赤く成る故初ハ大山出火なりと
たきどもは天色赤く成ぬ是ハ火の成事と云書
ちも肉ハ赤色同も別々名古座の方ハ蔽ハ

後ハ満天砂ハ赤く平一面ハ火のどく赤く
成る中ハ松葉の後のどく腐白ハ長ハ條を
自然ハ成細ハ成ハ雲のゆくもとありて
竹ハもかり兼ハも甚ハる赤味ハ赤色ハ
此竹成り事とぞ思ふ人ハ赤葉の思ハるハ三
刻とハ漸ハ小落ハ成九ツ頃ハハ皆消失と
勿論何の故と云ハるも唯好ま味ハるハ思
かりハ事ハと云ハるも又母の思ハるハ又
松葉松遠飛ハも能ハる事ハ
竹葉某ハ青ハ居ハる故天ハ一面ハ赤ハ成
見入ハる者ハ何天ハ赤ハ成リたり
と云又兼ハ赤ハ成る時ハ起リ見入ハるハ

那居より相更りの能く支るべき代末曾きる事にて家
も妙く並び希く成事の後代にこそましまさる事ありの
とりの事ありて生隆の玉骨と成りて先南おぬいさ
時と先くまき事こそ有果の事こそ出ると妙極ん
がり一車と松返舟の世のく支りて心海並座と事と
は日京地めく一戎の時頃より山の方の空一面は赤く
ぬく村置の大事めをゆくと高山の村本より火背く
一時は燃登る勢いよ見えたるは山大事出来たりと
驛と出ると一竹回るとん鞍馬の山と見えたりと
まき又若狭路の山よえ近くとりて小馬りて居る
内り忽ち翹く光りの数條もまきり天の向ん降り
南と居る艶艶波りて思ふ因くとりて東西は馳せ

遠のく驛とまき又ハ竹成天愛とては出ると漆の
居る驚く族と多し時接りとも松子分るとまきハ藤の
くまき人もの見居るとどに赤ぬい東のさり
巡る根り見えと彼より一條と伝く小落りたり
子の刻ととハ消然ととる若狭の國とハま日の
暮合より居るひるるまのわう方に見あるとまき夕日の
名ありと云居ると内り伝く高し翹きと出ると條も増り
く海とハ血と湛とて居る松と成ると又飛賀の國とハま日の
英智に居ると雲とむと海とに艶艶と赤えほのぐと
見えたりとるまきハ毛も夕日の輝ととるくくと出く
見ると中と目と驚くと光り伝盛りと出く忽ち満天
火のぐくと伝く翹ととるたりとや又或記ハ日申の刻

小方のやうの赤澤現ま出次第に東へ巡り赤澤の
右の赤澤も亦諸別と照さく云又日海とに大振の
如くも氣天と実出へ後より多きく軍中へ通達せり
と云何のさせよ東を松前の人々の後ると西へ長崎の
人の後ると同一勢うく南都ゆへ八咫八丈と京の赤
船へんま中へ赤くも嘗て大舟の量の火災へるごと
く云ふやう又大和國へ去る宮へて石へて國へ出
の便りうへ水へて流入る者やうと造りてる軍宛あま
あましく二人の住ける所へてえらるうへ一依くともと
去俗の只禪り昔火のぬの海へる時へ人皆は完よかく
まゝく命を全させしゆへて日來恐る事よ云傳る故
是ぞ穢のたのぬの海へりて世の滅する期の来り

成へ一今も此室宮へて隠るごとくも一騷るるを
支のりてと之格別好愛天震つて毛ごとく思ふ程の荒
れへて洲へてやまうらうけ年を六月より八月と百者餘
雨の諸國大旱魃へて難儀せしとて支未の標示を
呉くも亦若くとの事とて

或書ふ然也の國海例邪海例の活海へ依渡る國へ
向ひく名ももて渡りてる事保十四年乃十二月廿八日
海と十四五里四方一面り赤く成也へて一六時へ八分
強く赤氣天よ西り國中白雲のてり成諸人の
恐怖大形ももて回夜八時より赤澤へて成也り
翌年九日の朝よ西り漸消去るもて海へての
赤く海へ加賀越中もての外陸へて若狭越前近江

美濃尾張伊勢三外上方筋國の八右赤澤大太と
見えたるより一記一先目根の事と見えたり天
地妖ハ別々掌のひらきこのなり

油と膏の女の事

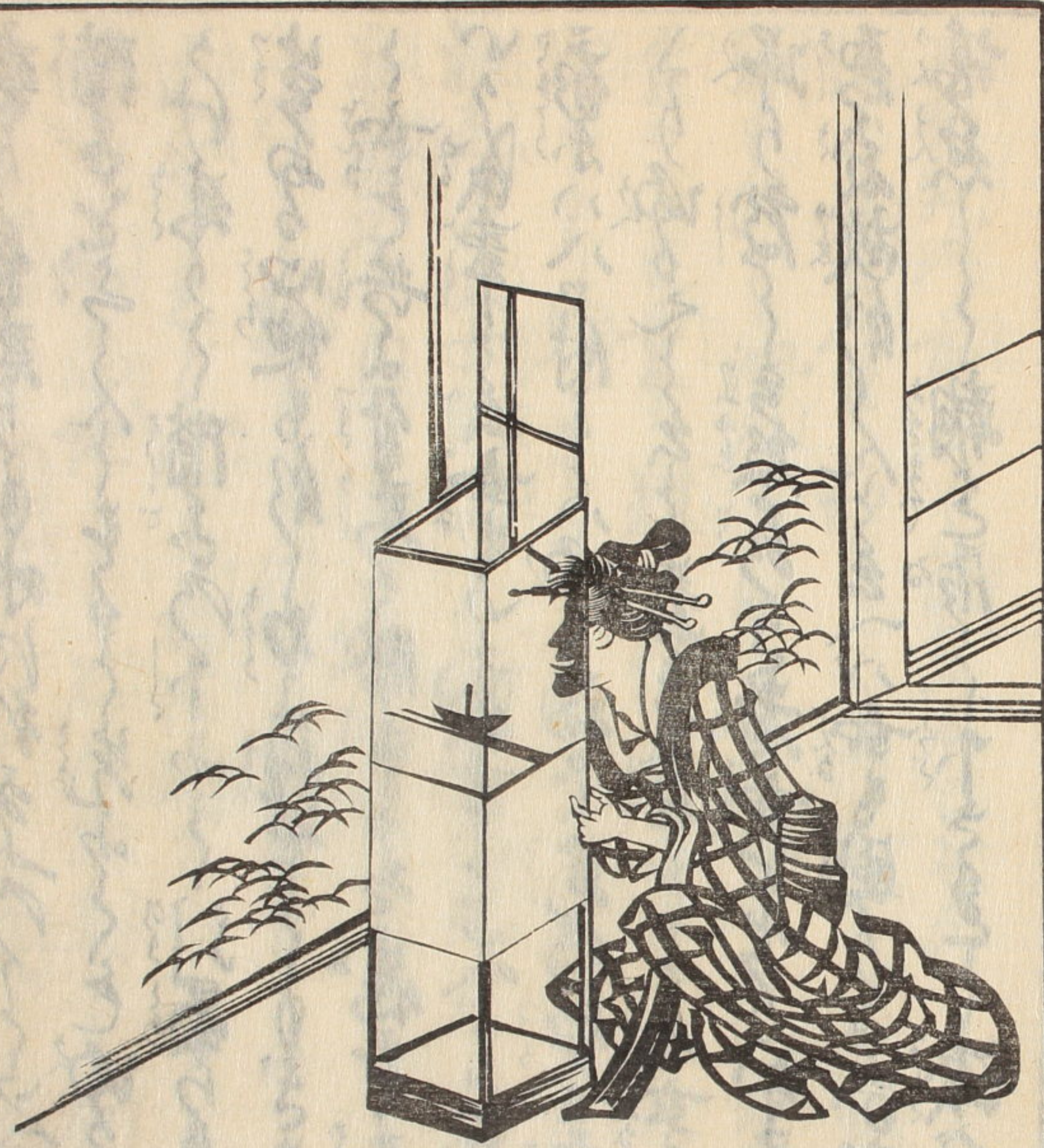
予が志する板原の竹某油と膏の女よ出入り
驚かざる事の事故終つて書記一ぬ又改の申の
事の一或日此男連き人どりまて大原河原の
大原一美指とせしに床のよせのて天舞悪妻終ら
森色の一帯はく面終つて日暮と成物とて道
と志すうとゆり一が観音前より八真の書とゆり
漸たたり一品川の宿と報怨りたる時うらも須よ
降来りいんもせんてゆりまて扱ゆ一お川の宿の

入口新篇と云

板原の入口の宿

西の紅を云 磁籠屋一とて

息とほごうに着るものゆり彼もゆり梅の下
ゆり梅の下もなまゆり 奥の一回一連形もゆり飯盛
女と出るとは酒もゆり時もゆり梅の下
雲の舞りともゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下
多と故女ハ外乃宿のゆり梅の下ゆり梅の下ゆり
は度女ハ海中へ送り出せし度女もゆり梅の下ゆり
風雨と送り梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下
まてゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下
静り梅の宿もゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下ゆり
やとゆり梅の宿もゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下ゆり
ゆり梅の宿もゆり梅の下ゆり梅の下ゆり梅の下ゆり



小雅

四
雁

と故其相子にまのこ報へ下へ懸ていふ女も
垂へ付来りて水に沈みゆく人さすまのこ
階子とていふ人さすまのこ先めくもゆのこい
うけ来りて階子の下めくもいふ人さすまのこ
生ある心地も形かよ任せくもいふ人さすまのこ
と女も共よ付来りて勝子とていふ人さすまのこ
いふ人さすまのこ女もいふ人さすまのこ
懸へハ付りてゆへに身をたえの報合懸ていふ人
うりゆのこいふ人さすまのこ若くも若くも女も
帰りなるといふ人さすまのこ若くも若くも女も
懸ていふ人さすまのこ女も固りていふ人
堪忍とていふ人さすまのこ下めくもいふ人
朝と居ていふ人さすまのこ下めくもいふ人

大初燈の前へ能見るといふ人さすまのこ
後の安見をよめりての義人ハ又もいふ人
涙のこいふ人さすまのこ涙のこいふ人
甘くもいふ人さすまのこ甘くもいふ人
出るといふ人さすまのこ出るといふ人
叔父ハ女紙入やと若くもいふ人
容貌のこいふ人さすまのこ容貌のこいふ人
小のこいふ人さすまのこ小のこいふ人
近出るといふ人さすまのこ近出るといふ人
前へ来るといふ人さすまのこ前へ来るといふ人
いふ人さすまのこいふ人さすまのこ
いふ人さすまのこいふ人さすまのこ

たきでも中々今世をわたりて思ひつゝり得るも
ま時を流るる心地もたゞ命捨ひとせし福もあま
河のやうのりつゝまこと事いへん生流遭りる者もこの男
具へてたつたる去りて又切らぬ海つらるる実の地を
ゆるぐ一せゆえうねのり遠めく候わの途つらると事
いへるもあらん心地をいへる平が友肉友竹某の地
或方の奥方には病をこの宮に養へる事もある所の地
あまこと〜候もあまこと事いへるやあまの地り
と老道つらると〜驚くも〜又いへるもあまの
甚なり〜申〜と候魔の類り出合〜命と事
も〜もあま事いへるも〜何れも〜命と事也

大蛇の事

大蛇と云ふもの夏に沼のほとけ森り候りあまの事
事いへる〜あま事いへるも〜候りあまの事
む掃偏る大蛇の事いへる〜候りあまの事
ゆ〜深山幽谷の事大蛇の事いへる〜候りあまの事
思の外候る事いへる〜候りあまの事
そのゆ〜候り〜時をいへる〜候りあまの事
小蛇の事候り〜候りあまの事
あり蛇と云ふ〜候り〜候りあまの事
ま〜に蛇と云ふ〜候り〜候りあまの事
美濃の國加茂郡麻生ハ井澤川に流るる後ろハ城也
後登の森の事いへる〜候り〜候りあまの事
堀の深ハ幽谷（地狭）の事いへる〜候りあまの事

深山よりあまのこころ中山道き回着より良の方へ言はば
この取はば藤生乃地へ昔より夫のうらまはづいづい住めり
ころ見たりと云はば或時持人びやう入居居て大成殿乃
下に獲物を待所に山上より俄り響きあつて大成殿
疑行より毛ハ竹の連なるそのまきまき連行のまきまき
くその連ひ来づとあとおおんと決地と云はば待受よ
回とめりてあまのこころをまきまきまきまきまきまき
此何故か乃来るやとまきまきまきまきまきまきまき
行居るにまきまきまきまきまきまきまきまきまき
此今の藤と連行よりその早く冷まづとまきまきまきまき
そのめりまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
あまのこころまきまきまきまきまきまきまきまきまき

初時を頼と奉り毛非只と明く初そのめりまきまき
てや毛ハ藤と連く口と何き行持ハ徹りあつて
事と我持人ハ敷の下居居て此ハ頼のことと実切
通るまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
山極りりたかに深林のまきまきまきまきまきまきまき
見付く外ハ生あまのこころまきまきまきまきまきまき
口と何きまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
事とまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
懸りまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
死よりまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
現よりまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

忘せしころは蛇ハ人ト云々傳えしり
あつては川向の吉田村の者よと云々
いふころハ一武人とり地と云々
い麻生つり二百里西の方武儀志津世村の山内ト
大地有る芝薪小松林と云々
たまごも骨より照り見るとそのハたつと云々
麻生の地よりたまごと云々
やぐの跡より我彼國は住巴地ノ類も又漢土の
書に蜘蛛の云々のハ一廢と云々
彼國よりたまごの回法なり世は蜘蛛の香も腹と
截割し出ると云々事ハ世傳えりたまご又書記
きく書もたま見ぬりたまごも虚実ハ如何と

思ひ居るがま肉或人と別業津の湯へ蜘蛛の香も
ゆ令せし者毒草と云々活きたる連糸あり居ると云々
と云々を澤然り安んずるまごハ精々記し
せよ云々の云々髪のももぬけ香もたまご目も
福を悪者赤むけの如く成居りたり又云々の
と者つり強引の島土羽村の物人等連糸
山深く入るまの毒ハ舌へわりりありあり
皆待居ると云々と云々故声と云々
たまごもたまごの友ハ所尋にゆく見ると蜘蛛様たり
居るまごと云々と云々地ノ氣と云々
居る故の形もカよなきと云々決地と云々
くらめりたまごハと吐出しり居る後膏ハ

形跡絶たんとす地と遊りあ敷うりと地を其八ハ
夢心ちうと心驚く成氣多くと抱とす漸く
聖旨にありと慈生好く更と好く治癒とすて
不思議り地命りうりと地毒もく想身
解無りと悲く赤むけと成毛髪ハ少くも
鼻も耳も消去と漸くたりの耳をりか一跡り居
うりと元来この病ハ逆例りハ餘程去積る男にて
あうが竹の昔も一吾とすうもや成り其思ふ
成りあると思ふとハ覚ちるも支ハいつくあり
し更り覚ちるなりとたり之治ハ右の足牙の着よ
心身と商人共ハ能安志の居くの時一と其八は十三
乃時り吾とす本條りの時知る人ハ成れんは愛と

形りとくは年磨と縹色と見らるに吾とすハ
天明の中ハの事とすえり是と分る時ハ深山とえ
性くも事と見えり及事又予が知巴川澄行素
の治に回人雅と時親類の方ハ来り髪鬚眉も
悉く白髪り老氣のりりと父の亦とすえあ
者と轉蛇と吾とす及あめく白髪と成り能え見
るべしと云う故知心うぐ能見吾とす今り地よ
吾とすありと相ひ者ハ義濃國加茂郡虎澤郷の者ら
尾別名古屋の吾とす擇ハ者らとす
十里津段の方あり
十歳程と成孫と轉蛇と吾とするゆ念りも俱と吾と
其轉蛇の腹と切裂と孫乃歌と九とす
中と吾とす事と毛と吹と底と高か流のぞく

一橋画



のんく人々面をこもす入る外なる靴敷き
も履き一奉る老人の事一俵を更切り後一
あうぬ命のあつた靴敷とりのまゝ先をバ又人の供
とと死つとあつた捨るごとく一各名を(か)靴敷
P甘く惣身跡もむ靴敷のゆへに革をく白むものと
指させ目のあつた眼鏡と入させ又回而後治屋丁の信
高と云の世治り内外あつた(左右)あつた靴敷と
未更りおまさせ十分よ支度と(か)乃靴敷のい
けり(か)貴日と(か)侍更居るま内に靴敷生束の
修り香もく後維り腹と切割と(か)近海り俵物
大勢と(か)一(か)連行(か)決地と(か)敷せ
一(か)物(か)香(か)時(か)後(か)為(か)落(か)月(か)後(か)切(か)破(か)り(か)惣(か)ま(か)バ

のんく人々面をこもす入る外なる靴敷き
も履き一奉る老人の事一俵を更切り後一
あうぬ命のあつた靴敷とりのまゝ先をバ又人の供
とと死つとあつた捨るごとく一各名を(か)靴敷
P甘く惣身跡もむ靴敷のゆへに革をく白むものと
指させ目のあつた眼鏡と入させ又回而後治屋丁の信
高と云の世治り内外あつた(左右)あつた靴敷と
未更りおまさせ十分よ支度と(か)乃靴敷のい
けり(か)貴日と(か)侍更居るま内に靴敷生束の
修り香もく後維り腹と切割と(か)近海り俵物
大勢と(か)一(か)連行(か)決地と(か)敷せ
一(か)物(か)香(か)時(か)後(か)為(か)落(か)月(か)後(か)切(か)破(か)り(か)惣(か)ま(か)バ

後人の記 本草綱目啓蒙は蛇ハ和名ニシ
キヘ之和産詳ナラス嶺南ノ大蛇ニメ北地ニ産セズ故ニ
南蛇ノ名有 中畧ウハミト訓スルハ非ナリウハミハ
一名ヤマカバチ 鈔和名ト有テ本邦大蛇ノ名ニメ漢名蟒
蛇ナリト云リ是を以見る時ウハミハ蟒蛇也 蛇
蛇をウハミと云フ後を遠く西に見ゆ物と云フ
蛇蛇と書又蟒蛇と書 づきもウハミと讀来り
多識編より蛇蛇とヲホヘ之又シカクイヘ之ヲ讀蟒蛇
とヲホヲロチと後々河り又事物紀原は大三圍長
十餘丈嶺下有鬚故名蛇牙長六七寸辟不祥と云ル
蟹の如の蛇蛇のう蛇蛇蟒蛇巴蛇南地埋頭蛇蟻蛇皆
大蛇の石たることと云 種ハ別種あり又同種異名成り

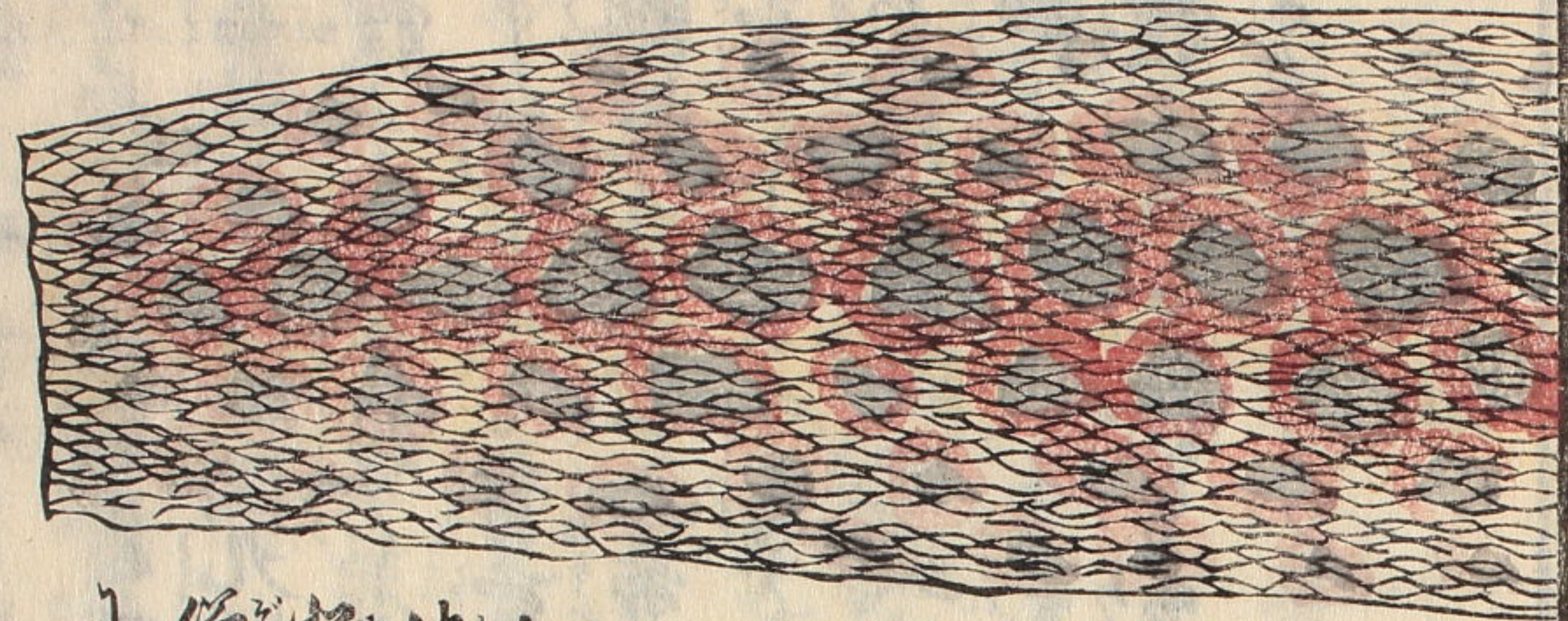
いまも其入葉のりを種類甚多 にも草と云ふ
りつもの蛇は澤山あり 龍蛇の類を能く
事に妙と云ふものあり 遠近獲者村人の見たりも
恐るゝ能く見たり 博覧の博覧と云ふものあり
去後故何事と云ふものあり 一致せざる振り
傳へるといふ 倫況と云ふものあり 一致せざる振り
ありつるあり云 見たりは巾二尺五寸長き高余
もろろ首尾に連続せざるものあり 蛇の
ともは皮のむくも 鱗の如き肌細く 背脊よりハ黒赤
黄の斑あり 白あり 又前足もむくびて
腹の間に 斑の雲色あり 又腹より 全身の小さな
そのうち二間及びと云ふ 大きな蛇の如きあり



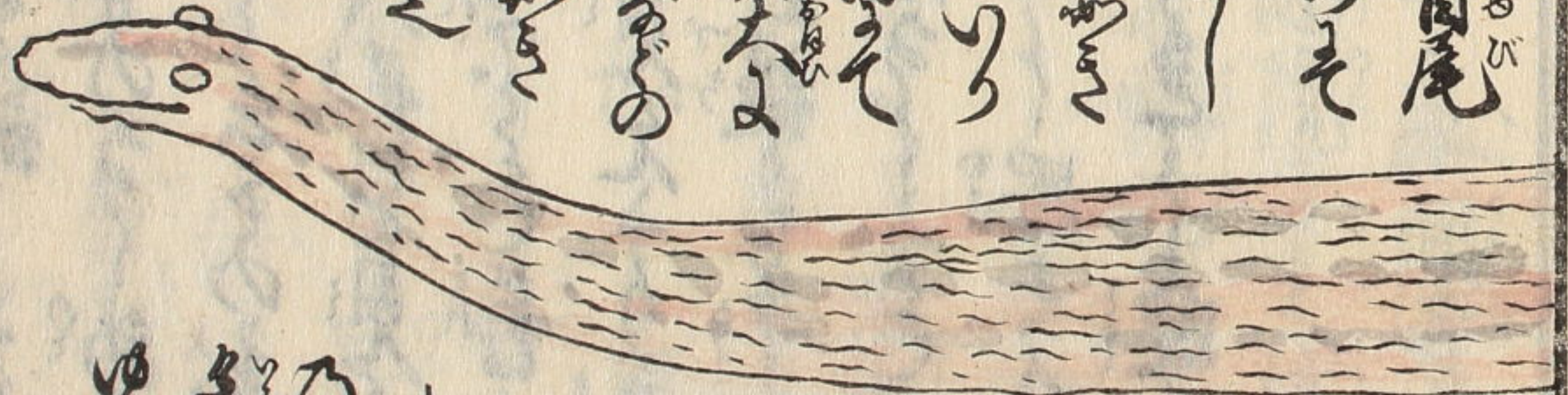
漆より汁りある
 赤の帯も多し
 のびるものもよく
 赤の斑の皮をよ
 う冠ハ橋頭のかく
 るまじも竹のまじ
 見るともさか
 そのよき標ハ
 濁りたるものよ
 びんえり長き
 二間もと餘り中
 中の二尺寸も
 何ふ一太根共



空身ハ辨蛇ハ
 文も中めく僅
 長一丈たり老さ
 大入りより程も
 つりも知雅のもの
 つりも帯のまじ
 尋常の蛇よりハ
 頭少き故に首の
 細くぬ指の長え
 面辨蛇ハ遠の
 つりもさ東和ちり
 尾ハまじりてけく
 と方前ハ大根の



少一蛇ハ首尾
 ハ切れるものも
 全無くハ
 皮もハ蛇の皮も
 辨くハさつり
 うも細くさか
 尋常の蛇ハ太よ
 遠つり漆の鞘もの
 たさつりものも
 皮もさつりものも
 省腹一板も
 俗ハ蛇腹
 まじり



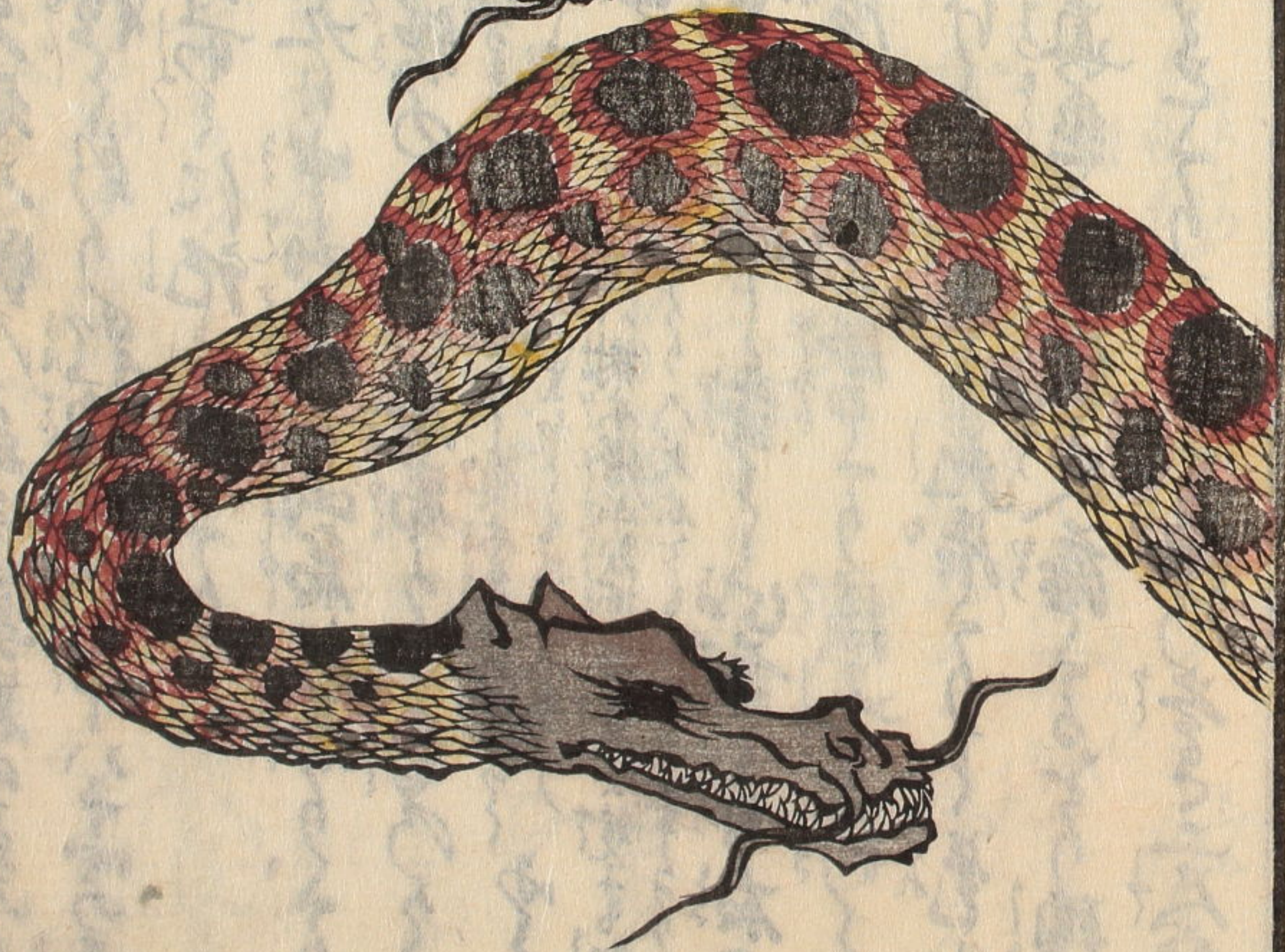
形ハ似たりと云
 色も腹も背も
 一板ハ蛇腹ハ
 辨蛇ハ全身も
 肉と接西ハ蛇の
 と接するもの故形
 漆も蛇ハ成るもの
 とハ見あれども
 小蛇の皮もさつり
 と見えさつり
 乃皮とさつり
 文漬ハ薄ハ年
 色と見えさつり

胸のきこも八彼も三三と見てもく見もいのみハ
頭も少一方りさきもはあすはつりも何く見ええも清く
改の骨格もさるるのしどく少く東和の骨の骨
さる雅神地は八たよ替り面群も骨立居て居て
あどの馬の書ける龍の顔は骨華よりまうさきく
忍ら表顔のそまう思ひの外やさく東和のあよ
見ええより十四の巻に骨と載る龍骨ハ前のもたつたりあく
小地のみ刺る顔の八たよ連ひつり角つらうあ紫生
せつり後よ書ける龍の顔の顔よりまきもまきハ
たりのしどく上層より生えつり人高とゆ更れも紫ハ
皆上層より生るものよ馬の書ける龍のし顔より生
ころも珍貴事と見てもまの龍ハ如何のやあ前よりも

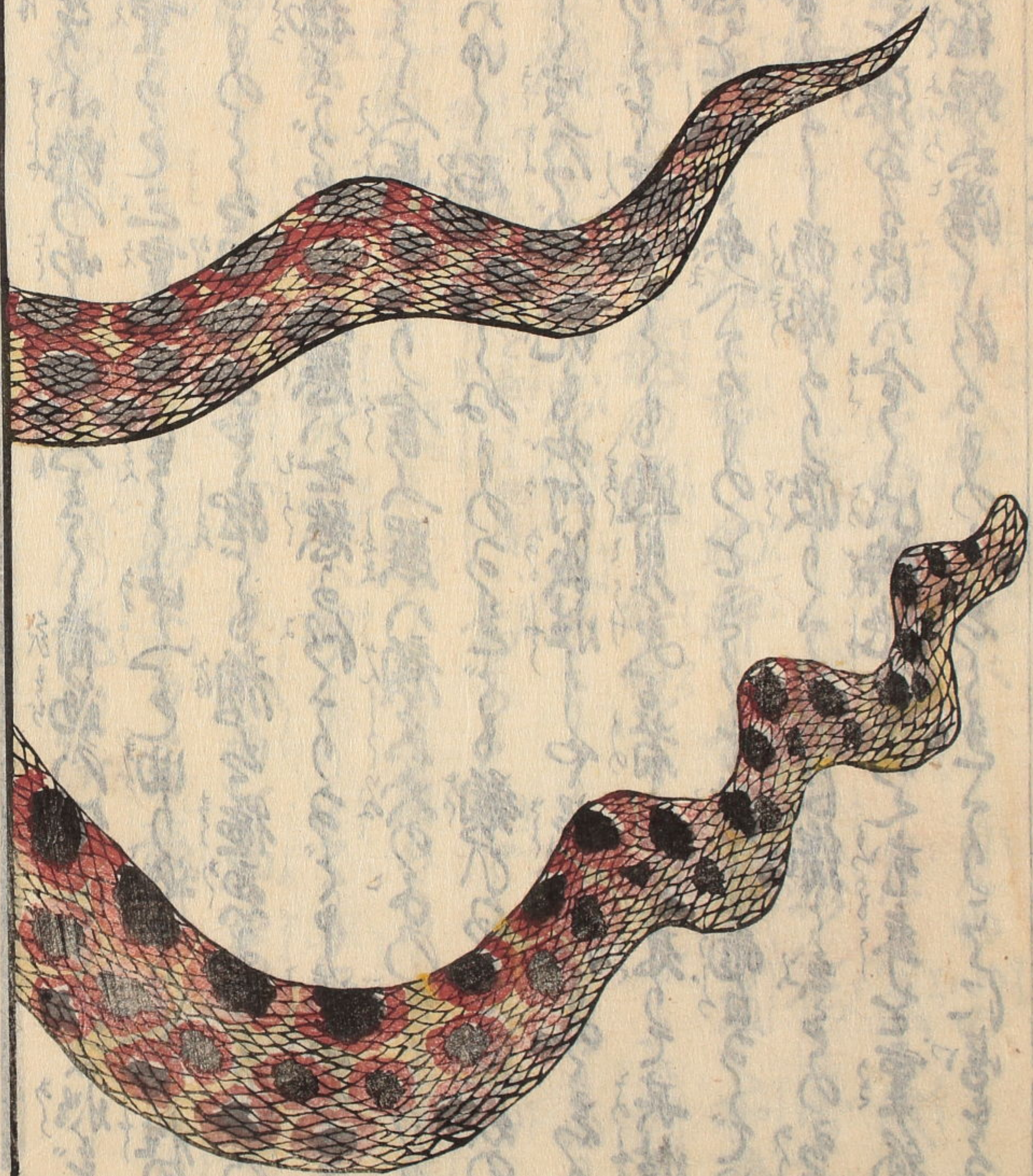
いふおつり小地のみ頭大さく首筋の細いものよ地も
膚を二重のものと三重のものもまき中へと曲り込つり余の性の
善なるものよ思ひまき紫も顔を極悪よりいふは
大切の拙さぐめく大慈の慈の似つりあどつ流のあまの
版表のく人馬とつり食入悪の顔のたのみのあつり
うもつりいゆく心愛のぬものよまきも類ひのまき強悪の
極悪へと変るる神地も如何に性や色は極悪のまき
まよのしどく深山のくも適見する者も迹残りて其性
の善悪と脱とあへるものよまきも神り雨白のくハ
先ハまきるよう一琉球のり改りつる地皮係とまそのま
はまのたと張あるははは金くは神地のはとを年と重縁
大の種短と清くつるものよまきまきつりまきまき



大蛇



三ノ三十七



冊地も大小少く濃淡も元来大地乃多之真黒の多く
又赤多白色もあましく様々なり 冊地乃事ハ十四の巻
みも委實記 垂々外に記し置たり

平天保九年戌の七月廿九日中山道中山宿に宿りたり

は疾の如く 出立の途の右宿より南のりて

山一ツ河さへ 餘園の軒より一歩僅の地あり 二里やいもあつたなり

疾と焼く 大地を伐出せしに 色ハ樹木澤山成り 多炭焼く切に

二十丈も二十丈もこのり 首尾へ落し 垂く 是前右の

本と取り 移るるに 大地宿より 大は 營より 後より 移るる

篤く見らる 大地頭 碑けく 自色く 死居たり 是也

先は 伐落す 木乃本は 真垂り 衆上へ 落るる 是なり 頭と

赤碑く 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり 是なり

舞のしりし事おはし度ゆらあまこは貝物こそこのては
 常と致し居りてさうり量もさる此業の死とせしも
 珍事之も亦あはる田向院の目今後かえん
 惣持各別の大蛇の通りたる跡を草木赤く枯れりとの
 きり前も志津野村の大蛇もあつたる跡を草木枯れ故
 通り道能くある事と安んずるも古武の世に故も難く
 思ひ居るには事と平が知に孫道言り出りて同り
 彼せりつらぬをぬも草木枯れり松根り業事と為る
 一は徳山の奥二三里もあつるには所をオガナイの事り
 たふ跡ありてとまゆとあゆりてありて居りては色
 めくはうもこととあゆり方よりオガナイくと云申其色を
 神代ものも奇りもむらりありて大木の梅多し丈九尺も

一丈よりともは徳平一面生繁りたる中をのり大蛇の
 出りたる跡新古幾條も中々是れ去まぬ事りたる跡を
 と云と数十町をわたりてに方六七尺なりも通りて
 通りたる跡を接たるに木居りて是れ皆赤黄成文
 小蛇を悉く枯れり彼の毒害の事りもさうり熱害を
 枯れし油も枯れりや枯れし油より居る枯れし貝も
 のりありて跡を能く是れ右(お切も難本乃頼も増切)
 てもめく人の世りさるにさるもさるも其ありて跡を
 差と冠りて居るに少くもあつる事りて是れさるる
 ともは彼地乃天さハ徑り六尺なりもあつる又ハ世の頭ハ
 能くびりの故着を後り九尺もあつる事りて是れ牛
 馬ハ巾さるは小蛇ともあつるもあつる事り

あり山岩巖樹の回と屈曲自在なり
實に善あるものことその来り時
地著き本著り
應へ自然と知る故拙樵乃顔
之勿海物人々も皆遊
隠きく出合の事とぞ本曹
内月々湯泉澤り
居るのた太ありとて侍
多もつちりのちさやま
然り見たる者又出合
とと格別大成の中多
居ぬものと見えたり
金と通る執念死後去
兼つる事

英徳盗現符を教つる事

江戸市谷薬王寺の秀家阿闍梨の上別
乃人々初め
因國多胡邪小津村
地著き惠澤律原の
なりは律原著と時幸寺大和國長谷
乃字彙に居る

あり或は右乃首小ま右の首斗
きり身月る者
来り威悔
吐根私立
竹某の者
著き
時乃り著り
子平万若
條殺り
金とた
あゆせ
生命限り
首あり
大痛
及ひ
終り
空
あゆせ
は時
あり
は金に
執着と
あ
右の
は
あ
持
つ
ま
あ
は
は
金と
極り
居
ぬ
竹
は
も
放
ち
さ
ま
あ
の
方
け
は
金
は
執
心
あり
こ
の
後
の
世
の
始
け
も
成
り
ま
あ
は
後
は
堪
難
る
も
あ
り
や
が
り
野
送
り
ま
あ
り
は
と
私
は
事
能
存
存
を
目
來
の
執
心
増
長
あ
り
の
裏
面
は
何
人
知
ま
じ
ど
好
穿
ち
も
探
め
か
の
死
人
の
お
つ
る
を
む
り
に
さ
ん
と
さ
ま
あ
の
放
ち
る
ま
あ
り
力
は
何
せ
指
と

こが園に先めくもつまり兼り金を取つてはめく
も首に刃付くも也行くも放つてはめく也行くも仕指も
心算のつても月くくも寄合教別ともうくも彼者の
善提と弟の回國修行ともうくくも又鐵梅りの花の
滅するも事もはたけい子の離るくと佛岡靈地(系指
ともうくくも)かこの死り彼死人のも首より
切取具思つぬ和傳とあつちの罷業活ともうくくも園
乃所符懸つて目遣りく活ると見入つてくくも
惠津律所の世もくくも中秀宗河内郡梨やともうくくも
惠津と云律所へ今より代往心算の任職めく世律所の
字繁り居るも時の事故安永天明の事ありとも是も
秀宗河内郡梨やともうくくも又松前乃和館より二里末大蛇村

とりの意りに小庵をば庵主と云元別の者ありがとめめハ
強悪めく大尉とあつて教心くくも六十六部と変り道心
和く世園に成り世にありく住居成居るがとも教心の
澤くくも村内や金子僅拾と満前辰の活りく死あ
及びくも金り執念と残るく死も兼右の金ともく
持つるもめく隠統とあり相死く後も右金と教する教
止事とほくも主候り埋葬するくは事と彼強悪の
知居く世法竊り三味けく養と坊壇と金とを
ともども教する候是もかよ仕きく指と二かづくとも
用きくも無つてくともと教くくも二の腕り握り付くり
也行りくも教する候も場ハむりに死人の扱と捨切
く候りくも教する候もきくもこのあはれ頼りくも握り



英泉画

竹とてり下りの腕肩り出〜〜〜之を物依り〜逆さ肩り
 落〜〜〜成〜〜〜なまあり〜〜〜物〜〜〜人回りの概の事
 事〜〜〜天冠の逆さ〜〜〜死人の腕と抱丸来り〜
 己の腕も又生れ〜〜〜肩とわら現報の炳然事と感〜
 六十六終〜〜〜諸國の神佛へ事行〜〜〜彼者の執着
 消滅〜〜〜已乃罪障消滅〜〜〜祈〜〜〜懺悔〜〜〜歩む世不
 多り住居〜〜〜悟道微塵の道志と〜〜〜成居〜〜〜人〜
 吐と聞〜〜〜故称佛と人徳本と人の彼地よ南陽の頂文政十二年
 戸〜〜〜怨〜〜〜彼庵〜〜〜汎ひ〜〜〜庵〜〜〜面會〜〜〜吐と安り
 人の活き〜〜〜ありあり〜〜〜腕と右の肩より終き寸許の居
 たり〜〜〜道心の眼をうる事ハ涙石の大悪人の善根は猶
 あり〜〜〜故餘人の及ぶあり〜〜〜何〜〜〜と年々〜〜〜時二十計〜〜

有りとの事稱佛上人より垂りて安んじたり前乃誘く割符と
合をふるめを事好きども合くあはれを切らざるうねの
事ハ以外めとまごく諸國よりつぎ事ありは後世も
又々出来ぬ事之まよ付ても死期は及びくハ金
瓶心ハ残すまごく一人の持行たりとも金瓶の用を
あきらむハ誰人のことぞれ居事之大集経より妻子珍宝
及王位臨命終時無隨者とも物をさども事善若く
過るる金故に取れり及びくハ愚智を成く瓶者一死後
ゆと取れりまごく曲事の出るるのまごく長く冥府り
送不腫くまごくハ殘念を極る事之七称善室ハ生有因
の實を女つぎ事取れり印りく金よ瓶を跡をまごく又
人の過をふる金をと貪り取事乃悪友くよくハ如何成

悪人と能き居るる事一事のまごく天罰道まごく
来世と侍りまごく松り所符とある事まごくあり
積不善の家より餘殃をくハは事故にまごく善を
勸め悪と懲りまごく終の生涯と安穩り送りまごく恥辱を
跡をる事事之爲り是亦の事ハ誰人も能知り居ること
好くも善くも但し記一派をぬ今世めく悪は報ひ
乃來の報ひ方存く又生と福く来世の成く報ひの
あるハ報ひく重くあることハ併然あるハ丹報の来り
ざるハ形更まのり重く思と送くまごく事と善く心は
おき別く隱悪あるまごく善之太上感應篇より善惡之
報如影随形とまごく影ハ近くまごく善之報は
にまごく成慶ありまごく安んじたり

は飯甚く強めき松子ゆきで跡もくも残るく去り
 うり跡もくもく顔と目合々くま松のまはり成僧りや
 世山奥ハ出家のありてあり也む甚不審なり目見お
 が悪可業とさせとら神のありて止めありのうそ
 弘法大師探のありあり滅めありのまや何ん心来ハ
 毒探ハ止のせらるぐのまことまも何きぐ又強者ハ
 安んぢくま松は深山ハ目入居るものぐ山の神や
 天物ぐこらくを山極ハ止るぐう心控くるとのハ危も何き
 のまや我く神り毒探るまべく寛きあるえ者た
 二人く一遊りてま白も毒探とやにくりおては
 多き中よハハナその丈け六尺迄の大突を造りて
 候びくまこの坊主の美見たり候ぐは莫ハはらまほ



中野我五

あぐらに云馬りくやぐ村持降り着る者た大勢
あ集りく彼大勢と料性後と割るにこい何に重坊
り増入るる電子と物あ故るもそ修りりは時ありて
か強争りる者並も争う後さく大の奥に合會せ
ざりしと昔よりイハナ坊より化るるの事有る
村色あくも古俗を傳る事ありしに現る坊より
化るるもつるも是ハ予が初巳中川村某年彼む
之を初後より居る住り安来の世より信別津獄の
前後ゆえに伊豆大なるイハナも折居る居る
なりと云い道行せぬも古俗ありし坊より成
と云來る事し文政三年庚乃其本曾路旅の村
イハナ乃坊より成る事やもく取く尋りくるよ

宗原教原色にありく人皇乃内イハナの坊より成
よりと云い世しと知り居る者あ人皇は水と津嶽山
より物く東のく流も出る行る云川の瀬もそ
ああ初後イハナと二尾まぐ一尾ハ足餘りり一
尾ハ少くちいさく足程あるの事腹中より電子あり
その電子その日山中より坊より無へくる岩のあ
電子の形は皆く甚く恐るるの世は修りり坊より
あぐら一町連の故その奥に目今やさきといふ
前乃之村の物今一回松本幸ありし坊より
津嶽山の麓修りり西と東の邊の故その場
二十四里程隔るる金一列の事一机ハ女と成程
入道成猫侯ハ光婆成の類ありイハナ坊より

會津郡と後さんとも秀行乃長尾町野た近長尾津
 郡中乃収支と集め是と結集し時山崎乃潮乃出
 柳津乃森巻もは地震り崩れ川へ落塔寺の
 観音堂新宮乃相敷も倒れ其明る年有十四日
 秀行乃逝しあり人皆河伯龍神乃崇り好りと是
 河へりとも
此系活と云い今津藩の二夜氏の人の先祖より申三夜職前
 隆景の法寛保年間あるも書きし元十六巻なり今津の
 事と多し記しりは年今冬中と成り漸七八巻と存せり
 事家のも今冬中と成り漸七八巻と存せり 今、同日の法也
 依り候せ記し是の纏も數百歳と強しハ是よ也
七の巻の記し 又毒流一の事ハ古くあり
 と見えり二代實録り元慶六年六月百僧正遍昭
 七ヶ條と記述せし中ハ流毒捕矣事と述せりハ條を
 又東鑑り文治四年六月十九日二季彼岩放生舎に同於

東國可法禁以殺生其とも焼將毒流類向後て信い由
 是流しなると色ハ古ハ毒流ハ因禁りの事と知
 ころ毒流ハ山椒の皮と薯蕷と石灰とを和して流す
 而とも又ハ辛皮山椒の皮胡椒の皮唐辛と石灰と
 黄精或ハ多葉粉の莖又ハ淡くともハ國々めく色々の
 仕方を事と見えり大回小矣なり

電乃降る事

文政十二年庚申二月廿九日昇龍ありよまき雷あり
 氷ゆりりり昇龍と云ハ俗ハ辰巻と云西僧騰蛇の教
奉奉綱月と云騰蛇化龍神蛇
 龍乘雲霧而飛遊千里 相いふ氷の流る事ハ龍は
 見えり蛇ハ蛇と云も今江のまの河へり大なる
 水とゆりりとも僅乃場形の遠いり同の蛇

乃記録也〜詳也の〜要と抄〜並ぬ二十九日色
中より空より一面り曇り〜松〜雲の文風の着像
か〜市谷色も雷と余程強〜鳴〜忽ち
ありに大夏程つり妙と更〜時降〜水色
日暮里深井谷中と野浪草色別〜又行徳舟橋の
方も甚〜荒〜概若とたよ記
御幸九色ハ雷り大夏程り水更りて降り
幸所石原ハ大夏程り〜雨一ツ目色ハ園子程り
ふん更りて降傘と破り〜と
市谷大久保ハ谷赤坂色も大夏程り〜雨新着
雨〜水〜と
西九下ハ雨申なる〜橋田外ハ空夏程り〜と

芝神明色も雨申り〜と
沖濱河殿色も水〜と
小日向色も雨申り〜と
大さ〜も板十更り〜と
小石川氷川と色〜白山色も春程の電多〜と
あ〜とす程り分と折〜と
菖類之悉くお流せ〜と
上野根岩大塚色ハ園子成ハ〜と
茶碗程も〜と
大塚と所〜は〜電ハ白石と更〜と
お石の〜と〜大お嫌〜と
更に〜と〜我勿海初めの程〜と

大い成の思ひ居るが夜彼より石をさくく
取に捨ひるはまて去事なり

年代記より後堀川院寛喜二年奥州石降如雨

續日本紀小光仁帝寶龜七年九月是月每夜瓦石及塊自落内豎曹司及京中徃々屋上明而視之其物見在經二十餘日乃止

五雜俎小萬曆壬子十二月廿五日申時四川順慶府安州無風無雲雷忽震動墜石六塊其一重八斤一重十五斤一重十七斤小者重一斤或十餘兩と見えたり是亦同日乃獲りまゝ石の降る事ハ春秋とをいめ曆史ホのを性くまて見ん

棠野色いまんげ強水て或人王子ハ行運水とさけ

植木金竹果方へまゝなるにまゝとて中もあつた落し
きり余り孫愛まゝく無面者の中へ入来り一時も往
て油毛乃後右若と名く見えハ解跡り末葉既
やどあつたりいさゝかお根とお扱あ多く七八寸ほど
のうが滑るる所にて

大塚所廢島乃墓者の側並る魁雄の方電よおとく
死せし中

子駄本西宮の道ハ赤良の庭ハ竹花大成が滑りてに
見る中よ黒きものりの石ももも後くく
より並り碎るにはいり見えバ大黒の形と鑄舟
たか古鏡之去石乃頼をたももくもく強の出るハ
奇くく



西へぞとるなり後河津せし名も怪成事なり
 は日不懸乃池より龍巻かへりし専ら云ゆしき行のせし
 水と二面より黒雲成り怒りし又よ松ふいふくさりし
 う仲町色へ八新新泥橋の敷多ゆゆ湯島乃切せハ
 ちき尺余の程と流しきくまも怪成事なり
 は白牡丹小日向小石川色より深井栗鴨首中色も皆ハ
 まくく黒雲成り成物とせりしことなり
 浅草堂前色乃若の云よえ三軒町へ田原町のまの雷敷
 の多中町家のうく異敷落り雷敷のく前色のみ
 三幸もく江是のう暖破きく死居りしと云又江の橋
 かく月八魁のくまの今一人そのまののくまの
 私を見やさびはゆも児童の見ると又よ鬼の子の

赤く毛も生ざるやうなりそのまのく前色のみ三幸をいそ
 けくまのく区の色も死傷乃異敷落りるうた
 お遠の身事と又の去うくけ物之難況多故おはけら
 う物どもお輝夜よまのけを皆まくに怪成世のま
 撰りし記一巻よりぬくまのまのくまの今敷りし
 まのくちのくまのく馬ハ驚きまのくまのく
 おろも多のり既よ物出物店まのく前付馬一丈を録
 らるひる者く結めくまのく圍りたりしなまのくまの
 にては
 相水乃況多くまのくまの記し先年巻人の既よ江へ
 洛水多まのくハ中禅寺乃洲水乃水とのたる巻の騰来
 まのくゆまのくまのくまの山寄養成の記し電ハ

震のふひのりものゝのりものゝのり
天皇三十六年推古四月壬午朔辛卯推古零大如推古桃子推古壬辰推古零大
如李推古子推古自推古春推古至推古其推古早推古之推古云々推古持統推古天皇五年六月朔推古京師推古及推古郡推古國推古
四十推古雨推古氷推古此推古後推古の推古奇推古と推古する推古に推古そ推古て推古秘推古も推古は

大城のりものゝに復み侍もいかに事もいともく物愛
後よまけをま始日光山のより雲起り向ひう勢
初後東南とささく電とぬくも事もささく勢り
駒込の西教寺の駒山が暮而一うりともほけう換
うら八重さう女侍りもささく金梅の花牡丹の花のどく
是と他人の云侍りさうべのひぬ唐去元の世に零電の
其状ハ電のどく見のぬく柳もろくも象のどくあり
とらや

元史外行志の云至元四年四月癸巳清州八里塘雨電

大過於拳其形有如龜者有如小兒者有如獅象者
有如環玦者或楯如卵或圓如彈玲瓏有竅白而堅
云々

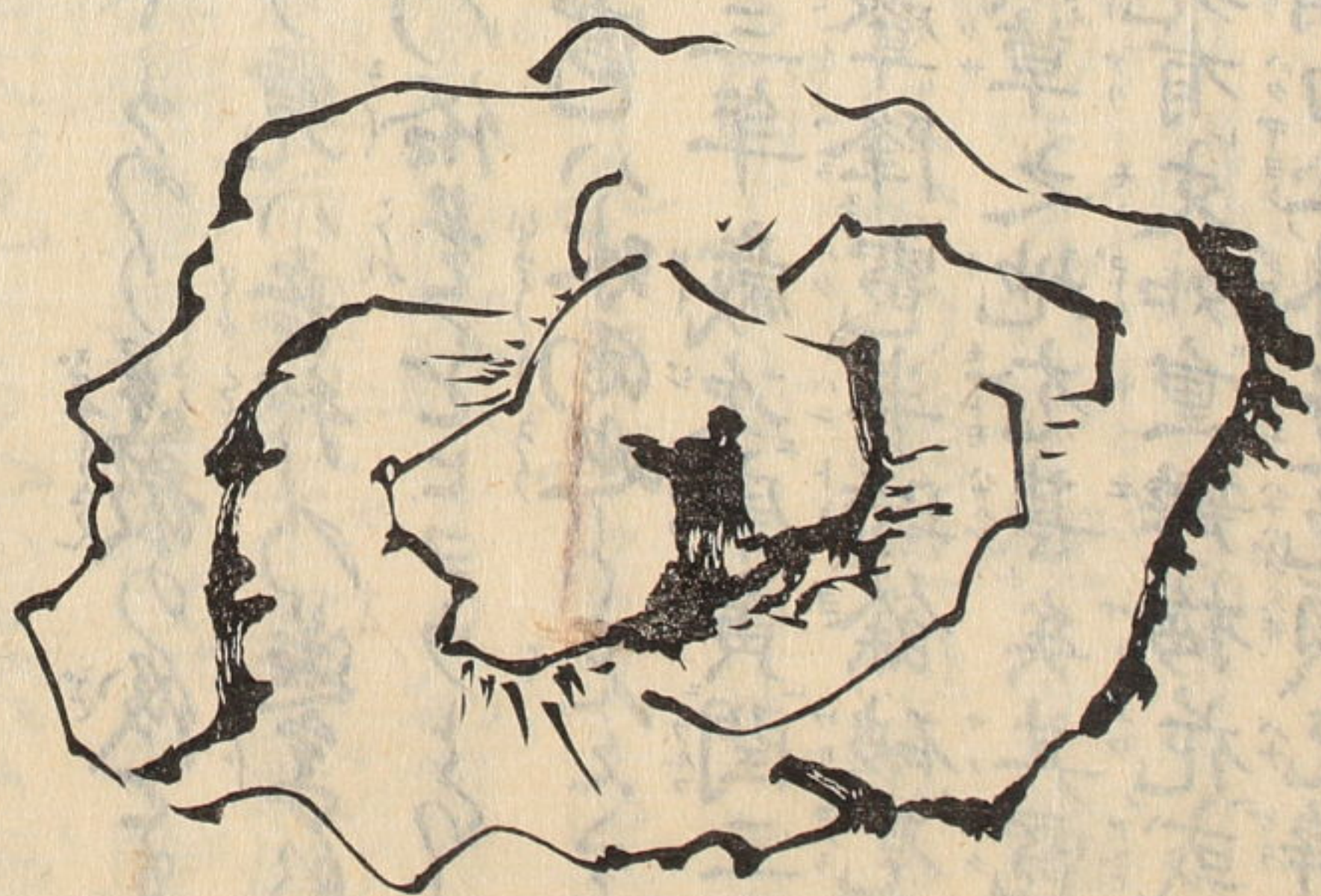
按むるに淫籍に載るもの既多いなる理りも物此を
そ痛むるものありさうもささくも交りたるものあり
断腸の氷と食も電とはささくもいふもささくハ辨と
侍りも電見量りもささくもささくもささくもささくも
ある雲霧乃冷際りささくもささくもささくもささくも
電ハ食り地中の氷とささくもささくもささくもささくも
あさくもささくもささくもささくもささくもささくも
ゆの雨隧ありささくもささくもささくもささくも
山乃麓りり作る農家ささくもささくもささくもささくも

早知り〜田畑〜心ぐま〜とまら〜奉〜と〜椿名山〜ハ
清も洗〜〜大い成湖氷河〜其湖水乃冬氷〜〜春〜
即り中心〜〜解〜〜ハ電〜〜者〜〜解〜〜ハ
電〜〜〜〜〜中心〜〜解〜〜ハ解〜〜ハ
者〜〜解〜〜〜中心〜〜解〜〜ハ解〜〜ハ
夏月〜〜〜〜日光山〜〜湖水も同〜〜〜
零〜電〜ハ中禪寺〜〜湖氷〜〜氷〜〜
虚況〜〜〜〜の麓〜〜里〜〜常〜〜に〜
謝在抗云電似是霰之大者但雨霰寒而雨電不寒霰難晴
而電易晴如驟雨然北方常遇之相傳龍過則電下四時皆
有余在齊魯四五月間屢見之不必冬也〜〜の實〜志言

と云

和訓栞曰新撰字鏡和名抄〜電〜〜あり〜送教の候〜とて
名は〜〜〜〜〜霰〜〜〜あり〜電〜ハ吾邦の造字なり
美葉集に九雪と義別せり今乃俗名とヒヨウとの〜
氷面〜〜〜〜陸氏が説り電ハ氷雨也〜〜
駒山潮音雨電紀事〜云文政十三年歲次庚寅閏三月
念九午後晴天忽然晦冥迅雷兩三聲降電半時餘破瓦穿
屋株草多敗都下駒籠根津上野淺草之地尤甚矣其電小
者如梅子栗實大者如拳如朮每塊有文如重瓣梅花或似
牡丹花皆於中心有一堅實如水精白玉外邊絶類花辨東
叡山中所降大者共二十錢或至五十錢駒籠西教寺裏
所降大者六錢二分或六錢橫量二寸三分或三寸皆有花文

乃^{スナチコレ}是^{セン}千^{ガイ}歲^イ之^キ一^ジ奇^{ツウ}事^{モシ}也^ハ曾^カ門^ニ稗^ガ雅^ミ曰^カ形^チ全^ニ似^ク玉^ニ珠^ガ其^{ヨク}粒^{ジュ}皆^ニ三^ツ
 出^シ此^ツ唯^{ベシ}合^{セウ}小^モ者^カ形^チ不^ク同^ク今^イ所^ト見^コ大^カ而^{アル}有^ク花^ハ文^{モン}者^モ乃^ニ錄^キ見^ケ聞^ク以^テ
 傳^ツ後^ト世^セ云^ニ



又^マ勝^カ田^ダ氏^シ乃^ニ大^オ雨^ウ雹^{ハク}行^{カウ}乃^ニ待^マ甚^シ且^ツ具^ク其^ノ形^ヲ乃^ニ變^ハま^リに^ナ

大雨雹行

勝田獻

庚寅閏月春盡日節入清和陽景驕向晚天氣忽變更寒威
刺々生迅颯雷公怒擊散硬雨明珠圓轉迸且跳湏臾怪雲
蔽四野林谷振動泣山魃大丸小丸破屋瓦十矢萬矢下九
霄鳥雀飛回無處避女兒錯愕互叫囂忽疑馮夷發憤怒手
握神槌碎瓊瑤更怪女媧補天處誤觸列宿墜斗杓別有花
紋麗可愛三出五出巧於描君不聞昔時雨雹如人頭耳目
鼻口婉含嬌天工奇絕不可測甚勝人間費刻彫安知天公
好伎戲別發秘藏慰無聊人道此物非吉兆陰氣肅致傷稼
苗誰知太平無事朝縱有災異忽冰消只今四海無一事此
物何足為氣妖雖然祥異天所戒只恐嘉穀不豐饒默禱皇
天后土會和氣五風十雨玉燭調

又天保七年丙子月廿日伯耆の國大山より一粟の黒雲起り

春のこゝ但馬の國大山谷と云一谷一山間の狭いところ
たりとひひの重さ半如余小なるハ山を越ゆる事
惟我も少なるも野田の中を斃るる事之は
主時を地行合居竹木より安んじ然も人々の懼
う〜〜〜中乃斃るるハ若竹と回りハ時乃電ハ三
尺落候きり故多々の難事多ハ斃るるも多り〜
〜又伯耆乃大山より一國橋一國を隔〜そのるハ
其除里ももも道也りハ少〜も電ハゆ〜
は而へ春のこ新作より降きハ一奇事〜

想山著聞奇集卷之三 終

想山著聞奇集卷之三 終

